

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381249

研究課題名(和文) 自覚的省察フレームの構成による授業観察法の構築 - 教員研修への応用 -

研究課題名(英文) Development of class observation system with the frame of introspective reflection
-Application to the teacher education-

研究代表者

森 勇示 (MORI, Yuji)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：90345942

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究で教員研修のプログラムを開発した。このプログラムは体育授業についての省察フレームを転換する目的で設計されており、2つの授業分析演習のセッションで構成されている。各セッションは90分を要し、編集された体育授業VTRを視聴し分析する。1つ目のセッションではフリーコメントをカードに記し類型化する。これにより受講者は自身の視点の偏りを自覚する。2つ目のセッションでは生徒の動き(技能)を焦点化することを条件に、教師自身の観点を構成する。2つのセッションを通じて、受講者は自身の視点の偏りを自覚し、フレームの転換になったと回答した。

研究成果の概要(英文)：I developed a teacher education program in this study. The program is designed for reframing of teachers' reflection on physical education classes and it is organized 2 sessions of analyzing classes. It takes 90 minutes in each session, and the teachers who take the course review VTR of classes. The teachers make free comment data in 1st session and they realize the deflection of their viewpoints. In 2nd session, teachers have to focus on movement (skill) of students and organize their own points of view. Through 2 sessions, the teachers attending this program replied awaring of the deflection and switching of their frame.

研究分野：体育科教育

キーワード：教員研修 授業分析演習 フレーム転換

1. 研究開始当初の背景

(1) 教員養成について養成・採用・研修の一貫性の弱さが指摘されてきた。平成 15 年より教育委員会と大学との連携による教員研修の在り方が検討されるようになった。

各地域で連携がスタートしたものの、研修の一部を大学教員が担当する例がほとんどである。

愛知県教育委員会と愛知教育大学は全国に先駆けて教員研修プログラムを開発する会議を組織し、10 年経験者研修を中心に主に大学を会場に実施してきた。その営みは毎年の評価をもとに今日まで修正し発展してきた。

(2) 従来、教員の研修内容の多くは、熟練教員(指導主事)や大学教員による講義スタイルをとるので、受講者にとって受動的な「知識の伝達」になりその成果が問われてきた。一方では、能動的な演習スタイルをとるにせよ、教員同士で実践を協議するケースが多く、教職経験の範囲内での知の再生産にとどまっている例がほとんどだった。

2. 研究の目的

本研究の目的は教員研修プログラムを開発することである。このプログラムは教師の授業省察力を能動的に構成するものである。実際の教員研修(10 年経験者研修)の中で 2 回の授業分析演習のセッションを行う。それぞれのセッションには次の目的がある。

(1) 1 つ目のセッションでは、従来の授業を見る観点(省察フレーム)が偏向していることを自覚させる。偏向の自覚により、自身の観点を改善する必要性を感じさせることを目的とした。

(2) 2 つ目のセッションでは、授業を見る観点を自分で構成する分析法に取り組む。これにより、省察フレームを自覚的に転換できることを認識させることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 対象

本研究は平成 25 年度から 27 年度の 3 年間に行われた愛知県の教員研修を対象とした。この研修は小中学校 10 年経験者研修(教科指導研修「体育・保健体育」)である。

研修に際し、事前に「体育に関する質問」として自由記述による受講者へのアンケートを実施した。この結果をまとめ研修ニーズを把握し、プログラムに反映させることとした。対象のプログラムは研修日程 2 日間の中で実施した 2 回の授業分析演習のセッションである。

(2) セッション 1 「フリーカード法」による授業分析演習(90 分)

「フリーカード法」による授業分析は水越の分析法¹⁾であり KJ 法²⁾の応用である。授業 VTR を視聴しながら、その都度思いついたコメントをカード(25mm×75mm の付箋紙)にフリーに記述する。その手順を以下に

示す。

KJ 法の説明

- ・カードは 1 枚につき 1 コメントまで。
 - ・何について書いているか言及対象が分かるように書く。
 - ・カードは付箋紙(25mm×75mm)を使用する。
 - ・付箋紙は 1 人 10 枚配布するが、10 枚以下・以上書いてもよいこととする。
 - ・記述内容の文意・文脈から同類と判断したカードを集約する。
 - ・集約したカードのまとめりごとに命名し類型化する。
 - ・KJ 法の特徴「集約して命名」の順を守り「命名して集約」という順にならないようにする。
- #### グループ協議
- ・あらかじめ 3、4 人で 1 グループをつくる。
 - ・グループ内で各自カードを出し合い KJ 法にて、集約する。
 - ・命名した内容をグループ代表者が発表する。

この演習で使用した VTR は小学校 3 年生マット運動の授業を 15 分程度に編集したものである。コメントの言及対象から受講者(10 年目教員)が授業の何に注目しているかが分かる。

(3) セッション 2 「コーディング」による授業分析演習(90 分)

「コーディング」による授業分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチ³⁾⁴⁾(以下 GTA)のデータ処理法を簡略化して援用したものである。「コーディング」とはデータを符号化して表すことを言う。GTA によるコーディングは「プロパティ(特性)とディメンション(次元)」に分割して表される。

一般的に教師が授業を批評するとき「何が・どうだ」と口述される。これは文章で言う「主部と述部」に該当する。この「何が(主部)」を「プロパティ」、「どうだ(述部)」を「ディメンション」として対応させて、授業 VTR を視聴しながら、コメントを「プロパティとディメンション」で表す。

その手順を以下に示す。

授業 VTR を視聴し、批評コメント文章の主部を「プロパティ」、述部を「ディメンション」として記述する。

受講者同士プロパティとディメンションを発表し合う。

発表の結果を見て気づいたプロパティとディメンションを追加できるだけ、想起しながら増やす。(理論的サンプリングという)

受講者全員の記述を発表し、全体協議で重要なプロパティとディメンションを 2、3 にしぼり、授業のキー概念を決める。

この分析で使用した VTR は小学校 2 年跳び遊びの授業である。跳び遊びは、将来の走り幅跳び・走り高跳びにつながる。低学年の

授業では多様な動きの描写が期待できる。

なお、GTA の処理法を一度の説明で理解することは難しいので、リハーサルとして「リンゴの作文」を行った。「このリンゴは・・・です。」という文章を5つ作る課題である。

- 「このリンゴは甘いです。」(味)
- 「このリンゴは大きいです。」(サイズ)
- 「このリンゴは高いです。」(価格)
- 「このリンゴは青森県産です。」(産地)
- 「このリンゴは赤いです。」(色)

上記の例から、「プロパティ」は「リンゴ」になり、「味」「サイズ」「価格」「産地」「色」の5種類の「ディメンション」が導かれていることを理解させた。

(4) フレーム転換の方法

フレーム転換はこのプログラムのねらいであり、最重要ポイントである。それは「セッション1 フリーカード法」で無限定のフリーなコメントを産出することと、「セッション2 コーディング」で観察記述の対象に制約条件を課すことである。本研究では「子どもの運動技能に特化して観察記述すること」を条件としている。

4. 研究成果

(1) 事前調査

研修受講者への事前調査「体育に関する質問」の質問領域は表1のようになった。

表1 体育に関する質問 領域別件数

領域	内容	件数
指導法	指導方法、授業構成や進め方など	467
評価	評価の観点の主旨、評価方法など	78
教育課程	学習指導要領に関すること	46
その他	体力向上、体育的行事など	39

各領域の質問の細部を検討し、各領域の共通点を研修ニーズととらえ、それが「子どもの運動技能をとらえる視点の欠如」にあることが分かった。

(2) セッション1

「フリーカード法」で産出した総コメントの分類を表2に示す。(H25年度から27年度までの3年間の総計)

表2 コメントの分類

受講者数	総コメント数	命名した項目
153	1497	265
		教師の行為
		921
		子どもの行動
		509
		運動技能
		2

表2 総コメント1497件の内訳から、子どもの「運動技能」についての描写が2件と極端に少ないことが分かる。最も多いコメントは「教師の行為」(授業中の教師行動と計画された内容。「先生は子どもに励ましの声をかけている」「準備体操が工夫されている」など)921件、次いで「子どもの行動」(整列や移動、取り組む態度。「しっかり並んでいる」「子どもはまじめに取り組んでいる」など)509件だった。

この結果から、授業観察・批評における教師の関心は、授業内容の適否とその運営マネジメントに偏っていることが分かる。ほとんどの教師にとって「子どもの運動技能」は批評の対象にならず、履修主義の立場による教育観に偏っていることが推察される。すなわち、授業とは履修されるもの、そのためには「教師の行為」と「子どもの行動」が順調に営まれているかが重視されてしまうということである。

(3) セッション2

セッション1の結果を受け、「コーディング」による授業分析は、「子どもの運動技能」に特化してコーディングすることを条件とした。技能としてとらえた言及対象を「プロパティ」として分割し、動きの出来や質を「ディメンション」として表すこととした。

跳び遊びの内容は

助走から上方への跳躍(将来の走高跳び)

助走から前方への跳躍(将来の走幅跳び)

飛び下りる遊び(跳躍時の空中動作)

の3課題で構成されている。



上方への跳躍



前方への跳躍



飛び下りる

プロパティの抽出数において受講者に差が見られた。(最少 3、最多 14) 受講者全体で抽出したプロパティとディメンションを「理論的サンプリング」(仮定として想定されるものも追加すること)で総和した。

表3 プロパティとディメンションの総和

プロパティ	ディメンション
タイミングが	合っていない ちょうどよい
全身を使って	跳んでいない
高さが	出していない
踏切が	両足/片足
着地が	前のめり/後傾/中立 横に倒れる
助走スピード	活かされていない 活かされている 途中で止まる
視点が	対象を見ていない
着地時の腰が	高い位置/低い位置
腕が	前にある/振られていない 拳上している
踏み切り方向	上/前 下(ダウンジャンプ)
着地時の膝が	曲がっている 深い/浅い
着地時の足が	並んでいる/前後/開いている 片足(駆け抜けている)
空中で脚が	振れている/止まっている 膝を上げている 後に曲がっている
着地時体が	倒れる/起き 前に投げ出している
着地時頭が	前方にある
踏切足と腕が	同じ/反対
腕振りが	両手/片手

ゴシック体は理論的サンプリングで追加

上記総和の結果を受講者全体で協議し、授業のキー概念をしぼる作業を行った。参考資料として、学習指導要領解説のうち低学年

「跳び遊び」についての例示を提示した。協議の結果「助走と踏切のリズム」が重要であるとの結論に至った。

(4) フレームは転換されたか

研修の終盤でアンケート調査を実施した。本研究に関する質問では「2つの分析演習で体育授業の見方は変わりましたか。」を尋ね、「非常にそう思う - 全く思わない」までの4件法での回答と自由記述の回答を収集した。

4件法では受講者153人に対し、「4非常にそう思う」が96人、「3そう思う」が57人で「思わない」「全く思わない」の否定的回答は無かった。

自由記述では「今までは・・・しかし、これからは」「目からウロコ」「新しい視点を得た」などの転換を意味する記述が91件あった。

現行の学習指導要領では「修得主義」の教育観が反映されている。しかしながら、授業の協議では未だ「履修主義」の教育観に支配されているのではないかと感じた。

授業を行っている以上、教師の目に子どもの動き(運動技能)が入らないわけではない。子どもに確かな学力を保障すべく、「修得主義」の教育観に至るよう教員研修の転換を図らなければならない。

引用文献)

- 1) 水越俊之(1987)「授業研究の方法論」明治図書
- 2) 川喜多二郎(1967)「発想法 - 創造性開発のために - 」中公新書
- 3) B・G グレイザー, A・L ストラウス(著) 後藤隆ら(訳)(1996)「データ対話型理論の発見 - 調査からいかに理論をうみだすか」新曜社
- 4) 戈木クレイグヒル滋子(2008)「実践グラウンデッド・セオリー・アプローチ - 現象をとらえる - 」医学書院

参考文献)

- M, ミンスキー(著)安西祐一郎(訳)(1990)「心の社会」産業図書
- D, ショーン(著)柳沢昌一, 三輪健二(監訳)(2007)「省察的实践とは何か - プロフェッショナルの行為と思考 - 」鳳書房
- H, ドレイファス(著)黒崎政男, 若林修(訳)(1992)「コンピュータには何ができないか - 哲学的人工知能批判 - 」産業図書

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1件)

森 勇示 「体育授業の見方を転換する分析演習の提案 愛知県10年経験者研修(体育・保健体育)から」第29回日本スポーツ運動学会大会(2016年3月27、28日)会場 日本女子体育大学 東京都世田谷区)

〔図書〕(計 1 件)
森 勇示 プリテック「体育授業の見方を変える」(2016) 136 頁

6 . 研究組織

(1)研究代表者

森 勇示 (MORI, Yuji)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号 : 90345942